

## <芸術監督>



建畠 哲（たてはた あきら）

現職：国立国際美術館館長

1947年京都府生まれ。1972年早稲田大学文学部仏文学科卒業後、新潮社勤務、文化庁を経て、国立国際美術館研究官（1976年～1991年）。多摩美術大学助教授・教授（芸術学科）を経て、2005年から国立国際美術館館長、独立行政法人国立美術館理事。専門は近代と現代の美術。

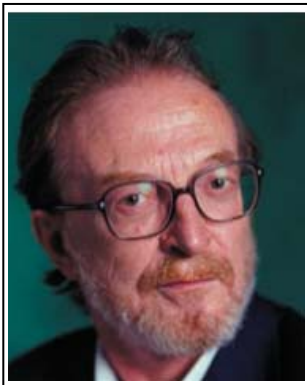
1990年と1993年に、ヴェネツィア・ビエンナーレの日本パビリオンコミッショナーを務めたほか、2001年の第1回横浜トリエンナーレでは4人のアーティストック・ディレクターのうちの1人。その他、2002年の釜山ビエンナーレ・エキジビション・ディレクティング・チーム（4名体制）のメンバーを務めるなど、国際的な芸術祭の経験が豊富。

国内の美術展としては、「アジアのモダニズム展」（1995年）、「インド現代美術展」（1998年）など、アジアの現代美術に目配りした展覧会を数多く企画。

国立国際美術館では「エミリー・ウングワレー展」（2008年）、「液晶絵画展」（2008年）、「アヴァンギャルド・チャイナー〈中国当代美術20年展〉」（2008年）等を企画。

著書は「ダブリンの緑」、「問いなき回答」（以上、五柳書院）など多数。代表的な詩集に「余白のランナー」（思潮社、歷程新鋭賞受賞）「零度の犬」（書肆山田、高見順賞受賞）などがあり、美術評論家としてのみならず、詩人としても有名。

## <キュレーター>



ピエル・ルイジ・タッツィ（Pier Luigi Tazzi）

1941年コローナタ、イタリア生まれ。美術評論家、コラムニスト、キュレーター。フィレンツェ大学文学部芸術学部卒業。ヨーロッパを中心にキュレーターとして、50以上の展覧会を企画構成。

1988年「第43回ヴェネツィア・ビエンナーレ」及び1992年「第9回ドクメンタ」（ドイツ、ヘッセン州、カッセル市）を始め、「傷（Wounds）：コンテンポラリー・アートにおける民主主義と救済の狭間で」（1998年 スtockホルム近代美術館）、「ヴァトゥ・ポイジゾンマ2001」（2001年）、「アルテ・アラルテ6」（2001年～2002年）においてキュレーターを務める。

1976年以降、フィレンツェ大学建築学部やヨーロッパ内外の大学、芸術学校、アカデミーにて講師を務めている。

1976年から1981年の6年間、アヴァンギャルド劇団「イル・カロツォーネ/マガジーニ・クリミナーリ」のメンバーとして活動。